

福島県現代俳句協会会報

復刊第2号 2020年・春

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石彦
福島市八木田神明十三の八 090(6220) 4757

四月十九日(日)

総会に参加しましょう

高野ムツオ氏の記念講演も

令和二年度の福島県現代俳句協会の総会の日程が決まりました。当日は併せて現代俳句協会副会長の高野ムツオ氏の講演も行います。

一年間の休止期間を経て再開した福島県現代俳句協会の令和元年度の活動は、手探りのものでした。会員の皆さんにもご心配をおかけしたと思います。新しい年度の取り組みを会員みんなで確認をし、みんなの力で県現代俳句の活動を充実したものにしていきたいと思えます。

また今後の総会は講演会を組み合わせ、みんなで勉強できるようにしたいと考えています。今回は現代俳句協会副会長で「小熊座」主宰の高野ムツオ氏にご講演をお願いしました。演題は「震災後の俳句」です。高野先生は昭和二十二年宮城県生まれ。句集『萬の翅』で蛇笏賞・読売文学賞・小野市詩歌文学賞のトリプル受賞。エッセイ集『語り継ぐいのちの俳句』では東日本大震災が俳句にもたらしたものを熱く語っています。昨年はテレ

ビの「プレバト」にも出演され、楽しい語り口で俳句の素晴らしさを伝えておられました。近著に『鑑賞 季語の時空』があります。

総会・講演会は左記のように行いますので、ぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。会場は例年と異なり、福島駅西口から徒歩三分の「コラッセふくしま」です。また講演会は公開とし、一般の市民の方々にも聴講していただけますので、ご友人やご家族をお誘いの上ご参加ください。入場無料です。なお、県現代俳句の会員の皆様には、この会報に総会出欠確認のハガキを同封していますので、ご返送をお願いいたします。

令和2年度福島県現代俳句協会 総会開催のお知らせ

日時：令和2年4月19日(日)
12:30~14:00
場所：福島市西口「コラッセふくしま」
302号室
～記念講演～
演題：「震災後の俳句」
講師：高野ムツオ先生(小熊座主宰)
日時：4月19日(日) 14:30~
場所：「コラッセふくしま」302号室
入場無料(どなたでも聴講できます)

第五六回現代俳句全国大会

湯田さん(会津若松) 大会賞!!

清水さん(福島) も特別選者特選

令和元年の現代俳句全国大会が去る十一月十六日に東京・上野「東天紅」で開催され、会津若松の湯田一秋さんの「歟の柄に令和元年夏と記す」が、題詠(「令和」)の部でみごと大会賞を受けました。湯田さんは昨年県現代俳句に入会されたばかりですが、素晴らしい句で最高の賞を受賞されました。中村和弘会長より表彰を受け、令夫人共々喜びに浸っておられました。おめでとうございます。

また前田弘先生の特別選者特選句に福島市の清水葉紀さんの「長崎忌セロファン色に母が座す」が選ばれました。さらにいわき市の平子玲子さんの「もう空気読まなくていい落葉です」が佳作に入賞しました。席上、第七四回現代俳句協会賞を句集『三日月湖』で受賞した須賀川市の永瀬十悟さんも表彰を受けました。

大会では作家・森まゆみ氏の「根岸に生きた子規」の講演があり、子規の俳句がいかに根岸という地と関連が深いか、当時の地図を示しながら具体的な句で説明され、興味が尽きないものでした。

会員作品7句

窯変

鈴木 満喜子 (福島)

人間の無明を嗤ひ鳥雲に
常識の埒外にをり銀竜草
定型もときには呪縛かたへ虹
墓腑に落ちるまで考へる
地球いま窯変のとき大夕焼
風に耐ふ蠟螂すでに父の貌
寒林の鼓動の一つわが鼓動

野の精

佐川 盟子 (白河・「鏡」)

犬帰る浅春の野の精帯びて
庇より溶けてぼつりと春の霜
髪少しほつれ雛の幼顔
高砂や野焼総出にくははらず
ゆつくりと屋根を翳らせ春の雲
遠来の古書の軽さや春灯
春満月よわひ半ばを慣れぬまま

返り花

石澤 遥 (郡山・「芳山」「日和田」)

塵芥を際だたせたる冬日差し
手折りたる蠟梅こぼす二く三輪
風花や邪心妄想混沌と
解体の仮設に薔薇の芽の赤く
落とし文ここは故郷へ続く道
虹を見るうれしさに水高く撒く
下校児の声弾けたる返り花

雪搔いて

海野 良夫 (湯川)

鼻奥のすつと裂かれ、あ、初雪
吹雪く日の息薙めかせ隣家へ
地吹雪を這ひ来て魂の失せし貌
雪搔けばこの世の棲家らしきかな
いのち哭けもの皆哭けと吹雪をり
今一度雪搔いて出す棺かな
雪搔いて我に汗噴く五体あり

お知らせ

秋に吟行句会を予定します。県内の皆様
が参集しやすいよう「県中地域」予定です。

県会員作品一句鑑賞

原発と野壺とありて草萌ゆる 春日石疼

掲句は県現代俳句協会会長春日石疼氏の第一句集『天球儀』による。二〇一四年夏、当時現俳協宮坂静生会長の要望で、震災後初めて警戒警備の現場をぎりぎりまで巡った記憶が蘇った。一読明解な句である。崩壊の原子炉と帰還困難区域。生命あるものの放射能汚染は止まらない。嘗て原子力発電所の電力は日本の光であった。その神話が崩れ、五十年は掛ると言われる廃炉作業。草萌ゆる季となった。問ふているのだ。今、人間は何をなすべきかと。(柴田郁子)

燈下親し一語拾ひて一語捨つ 加藤征子

県会報・復刊第一号「会員作品七句」より。
俳句を作る人間にとつて、この句は俳句を作っている情景以外思い当たらない。書いては消し、書いては消しの繰り返しの中から、ある時天啓の一語に思い当たる。その瞬間の達成感(そして安堵感)！これがあるから俳句はやめられない。「燈下親し」という季語には秋の夜長を楽しむところが含まれている。「あなたもそうですか」と声をかけたくなる一句。(春日石疼)

私を変えた一句

春を待つ見馴れし山に囲まれて きみ子

服部きみ子（福島）

子育ても一息ついた四十才の頃、地元松川町俳句会の門をたたきました。講師は高橋紫光先生の教室で大勢の方が居られました。

当時、先生が入会されていた結社に加入する事になったのですが、句会にも結社にもほとんど泥縄状態が続いておりました。掲句は俳句を始めて数年経った冬の日に詠んだものです。山並を見てみると、ふと「見馴れし山」というフレーズが頭に湧き上がり、何の季語を置けばいいのかと考えた時、「春を待つ」が思い浮かびました。この時俳句と言うものを少しとらえる事が出来、身近に感じられる様になった私の一句です。

平成四五年、義母を看取ってから上梓しました句集の題にはこの句からとり「春を待つ」と致しました。又、当時の結社の先生が来福なされ、大会が開かれました。そこで特選となった「耳に聒抵出来る話や四月馬鹿」も記憶に新しい句です。

一句一句読み返してみますと、その時のあり様が懐かしく思い出されます。これから先どんな生き方が出来、句は詠めていけるのか、自分に問いかけている昨今です。

明け易き樺にしるす生死かな 加藤楸邨

渡部 健（浪江）

掲句は、加藤楸邨の句集『火の記憶』に収められている。昭和二十年に東京大空襲があり、前書きに（五月二十四日、一夜弟を負ひ、長女道子、三男明雄を求めて火中彷徨）そう記されている。

私がこの句に出会ったのは、東電の原発事故による避難から約一か月が過ぎて、福島市の避難所に居た頃である。大地震や放射能の恐怖が稍薄れ、避難所暮らしにも馴れて、漠然とした安堵感を少し抱いた頃と覚えている。とは言え、まだまだ多くの心配や底知れぬ不安があり、混沌とした状況である。

そんな中、掲句を一読し、衝撃を受けた。強烈な内容にただただ驚愕した。一瞬が生死を分ける中、一面火の海の街を一夜弟を負い彷徨したと云う。私等とは比較にならない程の過酷さ、ぎりぎりの極限状態で在りながら、強靱な精神力と意志で詠まれた句に「何のほほん」と避難所暮らしに安堵しているんだ。此の非難の現実、被爆地の今を詠まなければ駄目だ。避難者の哀しみや苦難を風化させないで、少しでも後世に伝え残すべきである。」と、そう叱責されたような気がした。私が原発避難を詠むきっかけを創ってくれ変えた感謝の一句である。



私の好きな季語

穂の芽 池田義弘(福島)

「山刀伐の太き穂の芽朝日出づ」
／池田義弘 昭和四八年「寒雷」
入会、楸邨先生の警咳を受けたくて「寒雷」東京句会に毎月のように出席した。先生は芭蕉の「奥の細道」を自らの脚で歩く様子を話された。現代俳句の欠陥を衝けと言うなら「この頃は頭の俳句ばかりと言おう」そこでどうするか、「歩いて詠む」「動いて詠む」「働いて詠む」と。私もその影響を受けて、まず最初は地元福島文知摺観音、医王寺から始まり、松島、山寺、羽黒山と芭蕉の奥の細道を辿るようになった。

月山には寒雷人の三人で競詠作のために登った頃はまだ元氣溼漑であった。この句、前日に羽前赤倉温泉に一泊し、早朝に山刀伐峠を目指した。登り口に泉（スズ）があり、私は土地の人を真似て露の葉を丸めて泉の水を飲み、喉を潤した。山頂には楸邨先生の墨筆による芭蕉の奥の細道の紀行文の一節「高山森々として一聞かず。木の下闊茂りあひて夜行くがごとし。……汗を流して最上の庄に出づ」の碑が建っている。

折から太い穂の芽を浮き彫りにして朝日が昇ってくる様子に遭遇することが出来た。そこから押切部落を通り尾花沢まで歩いてゆき「芭蕉・清風記念館」を見学した。館長の大類林さんにお会いして当地の蕎麦を馳走になったのも遙かな思い出である。

新入会員紹介



前号に引き続き、平成三二年一月以降に県現俳に入会された人の作品と抱負一言をご紹介します。みんなで新しい仲間を歓迎しましょう。

櫻井 潤一（会津若松）

静かなるつくばひありて月を待つ
こぼると手をかざしけり今日の月
吾が父の無月の如くありにけり

「芸術はくたびれをなおすもの」とと数学者

岡潔が小林秀雄との対談で話しております。

私の一句で誰かのくたびれがなおれば俳人冥利に尽きます。

植木 國夫（福島・「小熊座」）

中間貯蔵へ砂まいあげて荻の道
惚けますからよろしくと母冬椿
人体に毛穴のいくつ秋徹雨

せまりくる老化とどう向き合うか、この国の

「付度」という不思議をどう案配するのか。

こんな嘆きは句にならないが、せめてとんでる俳句を作りたいと思っている。

阿部 ゑみ子（福島・「小熊座」）

一耗のクマムシ雪を眠らしむ
杉の雪堕ちれば青き音となる
トノサマバツタ飛んだ教頭追いかけた

現俳に入って2年目です。今年は、ぐだぐだしている時間を少しでも俳句にあてたいと思っています。特に俳誌を読む集中力がほしいと痛感しています。

永瀬 十悟（須賀川・「桔槔」「翅の会」）

蜜吸うて蜂震へをり波の音
潦にはたづみ虹にはたづみ
宝船とは難民を乗せてこそ

俳句を二十代から始め、東日本大震災と原発事故後は時代を詠むことを意識する。故郷須賀川の「牡丹焚火」や「松明あかし」を俳句に詠む活動、高校生に俳句に親しんでもらう「須賀川俳句の集い」を続けている。

会員新刊句集紹介

佐川盟子「火を放つ」

白河市在住、同人誌「鏡」同人の作者による第一句集。そこはかとしたユーモアと官能性をそなえた作品が並ぶ。池田澄子による帯には「この人はオバサンにならずに長い時間を水晶のような硬さと透明感をもって生きていくのだろう。じつくり書いていく人になりそう、と感じながら友達になった私の勘は間違っていないかった。」とある。日常の中の発見が独特であり、それを繊細な感覚と確実な表現力で刻印。

滔々と流れ岩魚を動かさず

火恋しけふ爪を切り爪を捨つ

スリッパに左右の決まる二月尻

セーターを脱ぐと外れる耳飾

留学生R岩海苔を訝しむ

脱げさうな靴で西日を歩いてゐる

ほたるいか海の底へと地はつづき

目覚めると此の世に腕が冷えてゐた

月欠ける速さ未来が古びゆく

著者は郡山に生まれたが、その後東京移住、二〇一六年に白河転居したため、東日本大震災を直接経験していない。故郷の人たちとその瞬間を共有出来なかつた複雑な思いが、

三月来そのときそこにゐなかつた

などの佳句に結実され、切実で印象深い。現代俳句協会刊。

（春日石彦）

編集後記

県会報第2号を出すことが出来ました。会員の皆様の絶大なご協力によって出来上がった紙面です。今後は年4回の季刊発行を目指していきたいと考えています。忌憚ないご意見をお寄せください。

（S）